

序

毎日新聞今日の隆盛は、過去七十年の光輝ある歴史と伝統に培われた「毎日精神」の見事な結実であると思えます。顧みますと、七十年という長い過去は必ずしも順調でなく、時には社運を覆すかに見える危機にさえ見舞われたこともあります。幾多の先輩および同僚諸賢の良識と、ひたむきな愛社心は、そうした危難の中を常に敢然と闊い抜いて「われらの毎日」を力強く護り通し、その都度かえって社業をより鞏固なものとしてきたことは私の常に深く敬服するところでもあります。ことに満洲事変以来、私たちが体験しつづけてきた幾多の国家的大事件は、私たちの社をもまさに狂瀾怒濤のまん中に投げこんだものであります。この長い深刻な受難期に、私たちは九十に近い先輩同僚諸氏を悲しくも殉職者として数えなければならなかったのは、今さらながら痛惜にたえない次第であります。

そうした尊い人柱があつてこそ、わが大毎日は一層輝やかしい今日の発展を勝ち得る

ことができた次第で、現在社にある私たち一同は朝夕それを思いながら、殉職者諸氏の英霊にたいし心から深い感謝を捧げると共に、併せて「われらの大毎日」をより躍進させるために、一層の奮励を誓っているものであります。

こゝに出された「東西南北」は、それらの殉職者諸氏にたいする心からなる追悼記であります。この編纂は実にはわが社の先輩諸賢の企画された意義深い遺業の一つであり、それをはからずも私が継承することを得ましたのは、まことに幸甚の至りと存じています。殉職者諸氏の御冥福と、最愛の骨肉を社業に捧げられた御遺族の方々の、今後の御幸福をお祈り申し上げながら一言筆刊の御挨拶を述べ、もって本書の序とする次第であります。

昭和廿七年四月廿五日

毎日新聞社 取締役社長 本田 親 男

序

新聞記者はあらゆる動きを捉え、そこに生起する波動を報道する任務を持ちます。天災、地変、戦争には、身の危険を冒してペンを走らせ、シャッターを切り、時として一つのニュース報道に運命をかけることも屢々であります。戦争といった人類の悲劇には、その故にこそ民族も国家も大きな関心をもち、新聞記者は当然そうした事態に動員もされ、また進んで難に赴くのであります。かくて兵隊と同じように、傷つき、死歿する悲しみは我々の胸中になお新たなものがあり、現在朝鮮において、外国の報道記者と、その家族が我々と同じ境地にありながら、しかもなお、その悲しみを乗り越えて戦場報道に活躍しております。

この小編は毎日新聞社の戦場における殉職社員を追憶記として御遺族方に捧げるものであります。もと／＼、この書は、かつてなかった戦場の悲惨な様相が、国内一般に理解されなかつた終戦直後において、還らぬ遺骨や、確認者のない戦死、さては日時、場所不明の戦死公報などに疑問を持たれた御遺族方のために企画され約束されたものであります。故に筆を執るに当っては、現地における戦闘経過を述べ、そしてその時それ／＼に与えられた任務が何であったかを記することは、殉職社員諸氏を歴史の祭壇に祀るこ

ととなり、違った地形風土の僻地における苦闘の状況をお伝えすることは、当時生き残ることのいかに困難であったかを理解する資料となり、さらにまた、共に苦しんだ帰還社員の間談や故人の知友の追憶談は、殉職社員諸氏の生前の面影を生々と浮彫りにして、その尊い最後を飾るものと考えまして、それらの諸点を編集上の骨子と致しました。

然し、実際に着手してみますと、収録の範囲を太平洋戦争だけに限ることは、当を得ないことがわかりました。たとえばその直前に上海支局長田知花信量氏の殉職があり、さらにまた太平洋戦争の原因となった日華事変やノモンハン事件などにおいても相当数の殉職者を出しており、日華事変前の成都事件でも特派員渡辺洗三郎氏が殉職しております。しかも、それらはことごとく歴史的にも時代的にも切り離すことのできない一連のつながりをもってしているもので、どの時期に線を劃すべきかを慎重に考究した末、遂に日華事変の前まで遡ることになりました。これはまた一面において「毎日新聞七十年」の附録としての意味が加味されたからでもあります。したがって前後十有余年間にわたる、熾烈な愛社魂によって描き出された専ら悲壮な殉職地点を眺めますと、北はシベリヤの果から、中国大陸、さてはビルマ、マレーなどを貫いて遠く南溟の孤島にまでおよんでおり、ことに比島においては最も惨烈な光景を現出しているのであります。

この書を単なる追悼録という名で出さず「東西南北」と銘したゆえんもこゝにありま

す。殉職社員諸氏の御冥福と、御遺族の御多幸をお祈り申しあげながら、命に基づきこの小冊をこのようなかたちにとりまとめた事情を御報告する次第であります。

なお、こゝで付け加えねばならないことは、取締役鴨井辰夫氏の長逝であります。氏は比島において、多数社員の脱出に努力し、あらゆる困難をくぐりぬけて生還されたものの、休養の暇なく、帰還第一歩から殉職社員や当時外地に残った幾百の社員の処理に奔走され、外地関係終戦事務局の創設に及んで、大阪は鴨井氏、東京は私がそれら事務を担当したのであります。爾來数年、長い間、御遺族方の父となり、母となり、できる限りの御世話をされ、この書も亦、鴨井取締役の提案にかゝり、病床に親しまれてからも、自ら想を練り、口述し、病革まるに及んで中絶されたのであります。

終戦事務局は、その後委員会制をとり、本書の刊行をもって最後の責を塞ぐこととなりました。しかし、その間にも東京では水谷 久世両氏、大阪では戸谷氏ら、この編纂に直接間接に関与された同僚を喪いましたが、幸いにして、多数社員の協力を得、講和第一年もって出版の運びに至りました。茲に些か事情を附記し、本書の序文と致します。

昭和二十七年四月二十五日

東
西
南
北

—殉職社員追憶記—

本書の表紙は雄性的の一新多かつた比島中で、
十四方面軍主力最後の地となつたルソン島山岳
州の一景観であります
本書の題字は聖徳太子筆の法華經範疇から摘字
しました

目次

	毎日新聞社取締役社長	本
序	毎日新聞社総務處理委員長	田
序		中
		香
		苗

回想の中國戦域……………一

白蓮瑛の歴史的概観…一柳宗海事件までの歴史的背景… 瀛海橋事件への経緯…二 谷口に及ぼす影響…三 華北に於ける報道戦…
 瀛海橋事件の第一報…四 暴徒の初の本社報道陣…五 聖中瀛海橋の報道戦…六 戦火上海に飛ぶ…七 広東作戦…八 海陸艦隊戦…九 大
 陸報連戦の初段階…一〇 支那派遣報道隊の全貌…一一 中國戦場の環境…一二 痛恨戦、海軍統帥…一三 文友社…一四 中國戦後の大作戦…一五
 かゝる戦へ…一六 渡辺三郎氏…一七 中山誠兵…一八 毛利文雄氏…一九 辻野氏…二〇 本多總監氏…二一 吉田四郎氏…二二 横田高明
 氏…二六 坂上彌氏…二七 藤岡徳氏…二八

満 ヲ 國 境……………三六

宿防の対立、奥ノモンハン事件勃発…三六 第二次ノモンハン事件…三九 第六軍の編成…四六 佐藤徳氏…四八

大戦前夜の上海支局……………四二

田畑孝徳軍氏…四四

陸 軍 報 道 班 員……………四六

海軍報道班員とその称号の沿革…四六 組織と任務…四七 激闘の道程による本社編…四八 マレー作戦…本報報道陣…四九 柳宗海氏…五〇

北社員捕縛の事實を記して…… 田中義雄氏…… 山本英一氏…… 田中進氏…… 柳澤一氏…… 藤原龍雄の人物…… 米澤博氏…… 安田安洋氏…… 河野廣氏…… 勝田源三氏…… 秋取進三氏…… 藤原龍雄氏…… 三浦多太郎氏…… 藤原天氏…… 林直樹氏…… 北岡一雄氏…… 平山秀人氏…… 藤野藤野氏…… 藤田隆男氏……

ビ ル マ 戦 線…………… 三〇四
 インパール作戦…… 痛くつなな英海軍隊…… 英 インパールの戦戦…… 連合軍の反攻高潮となる…… 各方面の運送…… シタタン河の戦闘…… 樋口守一氏……

沖 繩 戦 線…………… 三三三
 第卅二甲の配備概要…… 慶徳個別島敷地…… 米軍、沖縄本島に上陸…… 天島作戦…… 戦艦大和の崩壊…… 水作戦…… 地上軍の作戦…… 司令部の學文仁隊長の甲の最後…… 下瀬艦隊……

在 外 社 員 の 引 揚…………… 三三〇
 ソ連赤本社員の場合…… 中国本土の訓練状況…… 沖縄、台湾の島嶼…… 比國の艦隊…… ビルマ、支人、仏国方面…… 蘭西、金洋の諸島…… 小岡巨太郎氏…… 大田原重雄氏……

外 地 関 係 殉 職 社 員 名 表…………… 三三三
 南方課から終戦処理委員会まで…………… 三三八
 南方課…… 南方新軍部と南方新聞委員会…… 一島、二島に於ける…… 島制禁止、南方部の在社員救済綱領…… 南方制禁止、

南洋社員本部の発足…… 臨時外地總務課職事始末…… 總務課總務課地方機關の協力…… 殉職社員合同葬（第一次）…… 比國沖繩支那地獄米糧運送綱領…… 南洋支那支隊への諸島海運運動…… 殉職社員合同葬（第二次）…… 島制禁止との後の

編 集 後 記…………… 三四八

回想の中国戦域

日華抗争の歴史的概観

第二次世界大戦の口火を切った盧溝橋事件は、日本軍の放った第一弾によって惹起されたものか、或いはまた蔣介石軍なし中共分子のいざれかによって点火されたものか、さらにまた日華両国当事者の周知しないうちに何もものかによって挑発されたものか、今日なお明らかでない。

柳条溝事件までの史的背景 しかしながら、いずれにせよ盧溝橋事件には起るべくして起った歴史的必然的諸条件が累積していた。いまでもそれを満洲事変前に遡って概観すれば、当時満洲にたいする日本の支配的な考えかたは、一日にいえば日露戦争によって獲得した日本の權益は、あくまで確保しなければならぬというにあった。加うるにソ連極東進出の脅威は、軍部をして国防の第一線は満洲にありと叫ばしめ、軍事、政治、経済などすべての面からみて、満洲を保全するか否かは、日本の死命を制するものであるとされるに至った。

一方、そのころ中国はどんな情勢にあったか、——この広大な大陸全土にわたって、嵐をまき起していたものは、国民革命であった。英国軍艦の加藤艦が清国を次植民地的地位にたゞきこんだ阿片戦争（一八三九年）以来、この国を傾けつくしたものは、たび重なる国恥と、満清宮廷、官僚、軍閥、地主、高利貸の腐敗、それにあくなき搾取の連続であった。日清戦争（一八九四年—五年）は次植民地に拍車をかけ、やがて日露戦争を誘発した。こうした中に、必然的に烽火をおけたのは、漢民族の民族闘争と、土地革命で、太平天国革命（一八五〇年